

第22話 聖武天皇と仏教

先に聖徳太子が弘めることに力を尽くされた仏教は、聖武天皇の御代に最も盛んになり、日本国中に弘まった。奈良の大仏はこの天皇の御代に造られた。

元正天皇は在位10年で御位を文武天皇の皇子に譲られました。皇子はその時24歳におなりでした。これを第45代聖武天皇と申し上げます。

美しく整った奈良の都

聖武天皇がご即位のときは、奈良の都をお奠めになってから既に十余年を経た後ですから、宮殿や役所を始め、もとの飛鳥の京から移した大きな寺院なども大抵出来上がり、それらは何れも瓦葺で堂々と立派でしたが、普通の民家は昔のままの板葺や草屋根で小さくみすぼらしかったです。

ところが、その頃は中国との交通がいよいよ繁く、帝都の盛んで立派なのは、即ち天子の尊い所以であり、天下のよく治まるしるしであるという考えが、唐からわが国にも伝えられていた時ですから、帝都の民家が宮殿や役所などとひどく釣り合わないのが気になったのでしょう。

ご即位の年の11月に、太政官は天皇に奏して、「帝都は万国から集まって参る所でありますから、これを立派にしなければどうして天皇の徳を表わすことが出来ましょう。板屋根や草葺は昔から伝わって来たものではありますが、破れ易くて長持がしませんので、むだな費用がかかります。どうぞ役人に仰せられて、五位以上のもの及び普通の民でその力のあるものは、瓦屋根の家を建てて、壁や柱を赤や白で塗るようにさせて頂きたい」と申し上げました。

既に商業なども可なり盛んになっていた都の事ですので、富んだ者も多くいたのでしょう。間もなく、日に光って美しい瓦屋根や、白壁や朱塗の柱などが、そこにもここにも檐を列ねて見られるようになり出しました。市中が美しく整って、いよいよ繁華になって行く有様は容易に想像されるでしょう。

それに、聖武天皇の御代の頃は、唐では玄宗皇帝の時代で、唐朝の最も盛んな時でありましたから、わが国から留学する学生や僧侶が頗る多く、彼の地の進んだ文物を盛んに輸入したので、わが学問も大いに進み、世の中もますます開けて、所謂奈良朝の文化を現出するようにもなりました。実際、奈良時代70余年の間で、最も盛んであったのは、この天皇の御代です。その頃の奈良の都がいかに美しく華やかであったかは、小野老が当時の有様を歌って、

青丹よし 奈良の都の 咲く花の 匂うが如く 今盛りなり

といったのを見ても分かります。

仏教大いに弘まる

さて仏教は、推古天皇の御代に聖徳太子がこれを弘めることに力を尽くされてから、次第に盛んになって来ましたが、聖武天皇の御代になって、俄かに目ざましい勢いで天下に弘まりました。これ

は、^{しょうむ}聖^{こうごう}武天皇^{とも}が皇后^{ふか}と共に深く^{しん}仏教^{ひろ}を信ぜられて、これを弘めることにご^{ねっしん}熱心^{ねっしん}でしたためです。

これがために、在位 26 年の間、天皇はしきりに寺を建て、仏像を造りなどして、専ら力を仏教のために尽くされたが、それにはまた、殊に信仰の篤かった皇后が、内からよく天皇をお輔けしたことも知って置く必要があります。

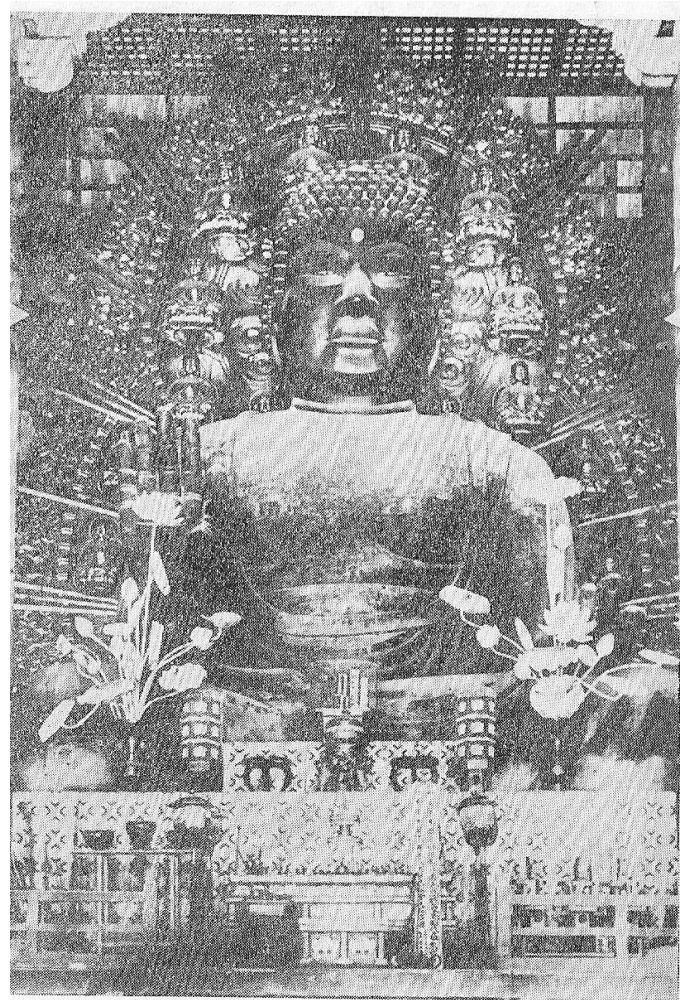
第22話 聖武天皇と仏教

ぜんこく つう
今も全国を通じていえば、いくらかの国分寺は残っているが、大抵は寺はなくなり、ただ国分寺とか
こくぶん ちめい あと しめ
国分とかいう地名だけが残りその址を示しています。

とうだいじ やまと
大仏で名高い奈良の東大寺は、もと大和の
こくぶんそうじ
国分僧寺として建てられたもので、また全国の国
そうほんざん
分僧寺の総本山でもありました。又、この東大
こくぶん に じ
寺に対する大和の国分尼寺は、今の奈良の西北に
ほっけじ あま
在る法華寺でした。この寺は今も大きな尼寺と
して残っています。

奈良の大仏の建立

さて、奈良の大仏は東大寺の本尊として造ら
る しゃなぶつ ほとけ ざぞう
れた盧遮那仏という仏の坐像です。其の高さは
五丈三尺五寸、顔の長さが一丈六尺、その広さが
九尺五寸、眉の長さが五尺四分五寸、目の長さが
三尺九寸、口の長さが三尺七寸、掌の長さが
五尺六寸、小指の長さが四尺四寸というのですから、
ちやうと想像して見ても、いかにそれが大きなものであるかは分かります（1丈は10尺で、
約3m）。実に世界一の大きな鑄物の像です。



奈良の大仏

しやうむ つく みことのり ぶつぽう ちから よ
初め、聖武天皇がこれをお造りになろうとご決心になった時の詔を見ますと、仏法の力に依っ
たいへい えいきゆう こうふく はか ばんぶつ さか る しゃなぶつ ちゆうぞう
て、国家を泰平にし、永久の幸福を図り、万物を榮えしめるがために盧遮那仏を鑄造することにする
とおお
と仰せられています。

こんぽん しゆい しんこう か
その根本のご趣意は、どこまでも国家のため、民のためでしたが、しかし、信仰を持たない者の力を借りては、却って真心を欠くことともなるからと仰せられて、この事業に従うものは、必ず仏を信じているものだけに限らせられて、漫りに一般の民を使うようなことはなさらなかった。

ひよう ごと しゅ ばんみん きふ よ けつ むり おさ
又、その費用の如きも、主として万民の寄付に依ろうとなされて、決して無理に民から納めさせることはしないようにと厳しく国司や郡司を戒められています。

僧行基の勧進

しゆい ほう ぎやうき で し かくち こんりゆう いわ
この天皇のご趣意を奉じて、僧の行基は弟子らと共に全国をまわり、各地の人々に大仏建立の謂れ
くどく と き おうぶん きふ すず ぎやうき とうじ めいそう こと とくぎやう
と功德を説いて聴かせて、応分の寄付を勧めて歩いた。行基は当時の名僧でして、殊に徳行の高い人
き たてまつ もの も ふるがね
でしたから、これを聴いた者は皆大いに喜んで、その費用を奉る者もあれば、持ち合わせの金や銅や古金
きしん
などを寄進する者もありました。

第22話 聖武天皇と仏教

斯^こうして費用^{ひよう}や材^{ざい}料^{りょう}は次第^{しだい}に集^{あつ}まったが、なにしろ大きな大仏^{ちゅうぞう}のことですから、その鑄造^{ちゅうぞう}に取りかかってからも容易^{ようい}には出来上がりませんでした。鑄^い上げるだけにも三年余の月日^{いあ}がかかり、その間には八度も鑄直^{いなお}したとも伝えられているほどで、いかに苦心^{くしん}したかが分かります。それに鑄型^{いがた}を作^{つく}った月日^{つきひ}や、細^{こま}かい細工^{さいく}をしたり、金^ぬを塗^ぬったりした月日^{つきひ}を加えると、五年三ヶ月になり、大仏^{ちゅうぞう}をお造^{つく}りになるご決心^{こしん}をされた時からでは実に十年目で出来上がったのでした。

誠^{まこと}に驚^{おどろ}くべきことで、これを見てもいかに聖武天皇^{しょうむ}が深く仏教をお信じになっていたかが分かります。

大仏殿

大仏^{だいはつ}の像^{ざう}の高さは五丈三尺五寸^{じょう しゃく すん}ですが、それがまた高さ八尺の石の台の上に、そして、高さ一丈の銅^{れんざ}の連座^{れんざ}を重ねた上に座^{すわ}っているのですから、その全体の高さは、七丈一尺五寸になります。そして又、この大仏のうしろに着^{こうはい}ています光背^{こうはい}は、高さ十一丈四尺、広さ九丈八尺という大きなもので、これには五百余体の仏像^{ぶつざう}が着^ついていて、それが連座の上にのせてあります。

それで、これをまつる大仏殿^{だいはつでん}が非常に高く大きなものでなければならないことはいうまでもない。実にその高さは十五丈六尺、間口は二十九丈、奥行きは十七丈の大きな建物でした。

大仏開眼の式

この驚^{じぎょう}くべき大事業^{だいじぎょう}が何もかも出来上がって、天平勝宝4年 --西暦752年--、いよいよ大仏開眼^{かいげん}の式^{しき}が行われた時は、既に聖武天皇^{しょうむ}は御位^{ごゐ}を皇女^{こうじょ}に譲^{ゆず}って上皇^{じょうこう}となられ、第46代孝謙天皇^{こうけん}がご即位^{ご即位}になつて四年目でありました。

それでその式の日には、孝謙天皇^{こうけん}は上皇^{こうみょう}、光明^{こうみょう}皇太后^{こうたいごう}と共に文武^{ぶんぶ}の百官^{かん}を率^{ひき}いて親^{した}しくお臨^{のぞ}みになり、一万人の僧^{きやう}が集^{あつ}まつてお経^{きやう}を読^よんだということです。

実に盛^{さか}んな事^{こと}であつたらうと想像^{さうぞう}されます。殊^{こと}に、その時の大仏は、今と違って全体に金^ぬが塗^ぬってあつたのですから、さぞ目も眩^{くら}むばかりの光^{はな}を放^{はな}って、莊嚴^{そうごん}この上もなかったことでしょう。

今の大仏と大仏殿

大仏と大仏殿とは、その後、戦争のために二度も火事に遭^あつて、大仏の頭は二度共に熔^{とも}け落^とちたので、その度毎^{たびごと}に修理^{しゅうり}を加えて来^もましたから、今の大仏は元のままではないが、その胴体^{どうたい}の大部分^{れんざ}と連座^{れんざ}の一部^{一部}分とは出来た時のままです。

又、大仏殿も二度建^たて直^{なお}したので、高さは最初の通り十五丈六尺ですが、間口は十八丈八尺に減^まじて、奥行^{おくゆき}は十六丈六尺に減^まじています。しかし、純粹^{もくぞう}木造^{もくぞう}の建物では今も世界一の大きさです。

しかもこれが、こういう大きな世界最大の銅^{さいだい}仏像^{どう}や木造^{もくぞう}建築物が、今から1260年以上も前にわが国に出来たことを思うと、実に不思議^{ふしぎ}な気がします。